

『吾輩は猫である』 第五章

Junko Higasa

二六時中珍事件が発生する苦沙弥郎の様子を精密に描写しようと思ったら、書くほうも読むほうも 24 時間では終わらないから「いくら写生文を鼓吹する吾輩でも 24 時間を洩れなく報告することはできない。遺憾ではあるがやむを得ない」とかといって、物騒な風流気を出す恋愛小説は誘われても書く気にはなれん。自然主義のように分析事項を描写する気にもならん。だから報告に値する奇言奇行のみを択んで精密に報告するために、今の時間帯は休息时间とする。そう断って心地よい眠りに就いた猫は夜中にふと目覚めて、報告に値する出来事を得る。泥棒が入ってきたのである。その姿を第一に報告するのが一般小説の習いのようなのであるが、写生文を志す吾輩としては心的描写をしなければならない。そのために人間よりはるかに優れた猫の聴覚を以て、視覚で表す以前の泥棒の動きを捉え、それに伴う心的状況を精密に描き出す。そして「いつ When、どこで Where、誰が Who、何を What、何故 Why、どのように How」を報告し終わった吾輩は、次なる叙述の順序としていよいよ泥棒の様相を紹介せねばならぬ。しかしその前に卑見を開陳して御高慮を煩わしたいことがある。

『古代の神は全智全能と崇められている。ことに耶蘇教の神は二十世紀の今日までもこの全智全能の面を被っている。しかし俗人の考うる全智全能は無智無能とも解釈が出来る』このパラドックスを道破した者は天地開闢以来自分のみであろうと考えると、多少虚栄心も出るから是非ともその理由を申し上げたい。

まず神の御製作である人間の「顔」については人間自身が観察を積んできた。古代ギリシャのヒポクラテス、アリストテレス、プラトンから始まった「栄養質・筋骨質・心性質」を基本とする人相学、18 世紀のスイスの牧師ヨハン・カスパー・ラヴァター(Johann Casper Lavater)の「人間の本性は容貌に現れる」観相学、19 世紀初頭のドイツの医師フランツ・ヨーゼフ・ガル(Franz Joseph Gall)の「人間の精神は頭蓋骨の形に現れる」骨相学という具合にである。その観察を経て人間は、これだけ多くの人間を製造しながら一人として同じ顔を作らなかった神の手際に恐れ入った。しかし別の立場から見ると、人間は同じ材料で出来ている。いわば本性は同じである。従って神が「人間」という種類の生物を作ろうとしながらこれだけ多くの顔を作ったのは、当初から違う顔を製造しようとした成果ではなく、同じものを作ろうとして作り損ねた結果ともとれる。文学においても同様で、創造主を製作者と置き換えると、文芸評論家は表面に多種多様の変化を起こすのが全能的技量と恐れ入っているようだが、それは当初からそのように作ろうと思って作ったのか、作り損ねて乱雑な状態に陥ったのか分らないではないか。よって全知全能は無知無能ともいえる。

このように神の製作の出来栄を無能の結果ではあるまいかと疑っていた吾輩は、それを一時に打ち消すほどの場面を目撃した。目の前に現れた泥棒の顔が、かの好男子水島寒月君に瓜二つなのである。『神もこんな似た顔を二個製造し得る手際があるとすれば、決して無能を以て目する訳には行かぬ』同質の人間を区別のできぬよう同じ顔に造り得たとなれば神は全能であると評してもよいだろう。文学においても、一銭銅貨ぐらいの目をつけた毬栗頭や怖い顔のイメージを与えない客観的視点で人間の本質を描き出せたなら理想的である。

さらに神の手際について触れると、顔による人間分類で優れた者と自認して東ア

